

第4節 矢張下島遺跡の水さらし場遺構について

名古屋大学名誉教授 渡辺 誠

1. 水さらし場遺構とは何か

水さらし場遺構とは、「アク抜きを主とする植物質食料の処理・加工の場であり、台所的な場所である」、と筆者は定義している。これを縮めて水場遺構というのは、適切ではない。人間の水辺における活動は、飲料水の確保、貝類の採集、船着場、さらには祭祀まで広範囲に広がっている。それらを一括として水場遺構とせず、明確にかつ個別に、水源地、水辺の祭祀場などによび、混乱を避けるべきであろう。

水さらし場遺構の問題は、そこでどのような作業が行われるのか、それを成り立たせている背景にはどれだけのことがあるのか、などである。すなわち、水さらしの作業が食料の処理・加工の過程において、どの段階に位置付けられるのかを考慮しておく必要がある。さらにさかのぼれば、各植物の持つ個別の水さらし場の必要性についての知識が要求されてくる。

煎じ詰めれば、どのように食料を採集して処理・加工したかという生活基盤の研究や、関連する貯蔵穴、石皿・アングインなどの加工用具などとの体系的な研究が必要である。

2. 水さらし場を必要とする植物質食料

水さらし場で水さらしなどの処理・加工の行われる植物の種類は、次の2種類に大別され、これに付随的な利用が加わっている。

第1群は、アク抜きのための一プロセスとして水さらしの行われる、ドングリ類やトチなどである。

これに対して第2群は、アク抜きの必要性はないが、製粉した後水さらしによってデンプンをとる、クズやワラビなどである。

これらとは別に、クルミは皮を腐らせるために、それをまた除去した後に残る繊維を洗いとるために水場が重要である。しかしこれは小川でもできることであり、必ずしも水場を必要とはしないものである。カヤ

民 俗 分 類	属	種（出土例のみ）	森 林 帯
A. クヌギ類 製粉または加熱処理+水さらし	コナラ属	クヌギ カシワ	落葉広葉樹林帯 （東北日本） （韓 国）
B. ナラ類 製粉または加熱処理+水さらし		ミズナラ コナラ	
C. カシ類 水さらしのみ	アカガシ亜属	アカガシ アラカシ	照葉樹林帯 （西南日本） （韓国南海岸）
D. シイ類など	シイノキ属	イチイガシ ツブラジイ・スダジイ	
	マテバシイ属	マテバシイ	

第62図 ドングリ類の分類

なども同様である。

第1群の代表例は、ドングリ類である。これらは4群に大別される（第62図）。

このうちD類のシイ類のみアク抜きを必要としない。C類のカシ類は水さらしのみでアク抜きができる。これらは西南日本の照葉樹林帯に多く、次のA・B類は東北日本の落葉広葉樹林帯に多い。旧利賀村域は、後者の卓越する地帯である。

A類のクヌギ類、B類のナラ類も、製粉さえできれば水さらしのみでアク抜きができる。しかし粒のままの場合は、かなり念入りのボイリングを必要とするのである。民俗調査の結果によれば、朝晩20回、3日間かかるので、単純計算でも120回のボイリングを必要とするのである。

そして、製粉技術の出現は縄文前期からであり、それ以前は粒のままであったのであるから、ボイリングのために土器は絶対不可欠であったはずであり、むしろそのために土器が出現・発達したとするのが私の考えである。この製粉やボイリングの作業は、水さらし場に近接し有機的に結びついていたと考えられる。

製粉技術の問題は、粉を入れる袋のための布の問題が重要である。しかも粉が流出しない細かさが必要である。前期に出現・発達するアングイン（編布）はこのことと密接な関係にある。

ではどうやってアクが抜けたことを確認するのであろうか。これはまさに染み出るアクの色の変化を確認することである。最初は濃い褐色、コーヒーと同じ色であるが、最後は透明になる。これは水さらし場の構造と関係がある。

次に問題になるのはトチである。このアクは、水溶性のタンニンであるドングリ類のアクと異なり、非水溶性のサポニンやアロインである。これをアルカリ（灰）で中和して流すのであるが、粒のままの場合は灰を溶かしたアク汁の中につける。また、灰を溶かした汁の中で煮沸して粉にし、両者とも最後は水さらしを行いデンプンをとることになる。この灰あわせを抜きにして、水さらしだけでは食べることはできないのである。

第2群の例は、クズ・ワラビやオオウバユリなどの地下茎・球根類である。これは製粉、あるいはこれに準じる作業でデンプンをとるのであり、土器などの容器に入れて何度となく水を入れ替え、不純物を除去していく。この場合は袋よりも土器が重要である。

3. 水さらし場の構造

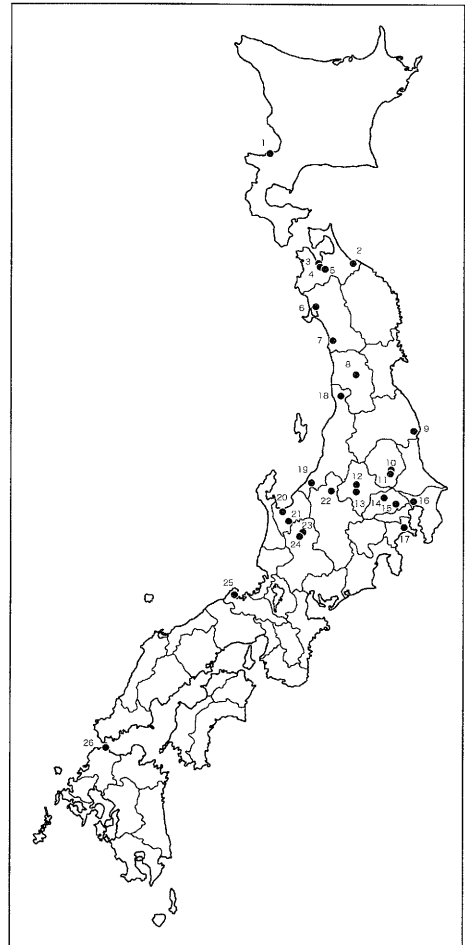
現在まで知られている類例を、北から順に列挙すると次のとおりで、縄文時代24例、弥生時代2例である（第63図）。

1. 北海道小樽市忍路土場遺跡（後期）
2. 青森県八戸市是川遺跡（晩期）
3. 同 青森市岩渡小谷（4）遺跡（前期）
4. 同 同 近野遺跡（中期）
5. 同 同 小牧野遺跡（後期）
6. 秋田県能代市柏子所Ⅱ遺跡（後期）
7. 同 由利本庄市上谷地遺跡（後期）
8. 山形県寒河江市高瀬山遺跡（後～晩期）

9. 福島県いわき市番匠地遺跡（後期）
10. 栃木県小山市寺野東遺跡（後～晩期）
11. 同 鹿沼市明神前遺跡（後期）
12. 群馬県利根郡みなかみ町矢瀬遺跡（晩期）
13. 同 北群馬郡榛東村茅野遺跡（後～晩期）
14. 埼玉県川口市赤山陣屋遺跡（晩期）
15. 同 比企郡吉見町三ノ耕地遺跡（晩期）
16. 千葉県市川市道免き谷津遺跡（後期）
17. 神奈川県平塚市真田・北金目遺跡群（後期）
18. 新潟県岩船郡朝日村元屋敷遺跡（後～晩期）
19. 同 西頸城郡青海町寺地遺跡（晩期）
20. 富山県小矢部市桜町遺跡（中期）
21. 同 南砺市矢張下島遺跡（後～晩期）
22. 長野県中野市栗林遺跡（後期）
23. 岐阜県高山市カクシキレ遺跡（晩期）
24. 同 同 たのもと遺跡（晩期）
25. 京都府京丹後市奈具谷遺跡（弥生中期）
26. 福岡県北九州市小倉区小西田遺跡（弥生中～後期）

水さらし場にとってもっとも重要なことは、大量の清流である。典型例は栃木県明神前遺跡の扇状地先端崖下、長野県栗林遺跡の段丘崖下などで、本遺跡の例は後者に類似している。筆者の調査した民俗例では、滝のように流れている場合もあり、少し湧いていればいいという程度ではなかった。

しかも泥などによる汚れは、絶対に避けなければならない。それは食料だから汚れを避ける、という程度の問題ではない。先に述べたように染み出るアクの色の変化を見て、食べられる状態になったことを確認するのであり、汚すことがあってはならないのである。したがって屋根で覆っていた可能性も考えておくべきである。その作業をさらに有利にするように、小西田遺跡では12個も板で囲った箱状の施設を流路の中に並べている（第64図）。そして下から上へ順番に移していけば、新しく入れたもののアクを含む濃い色を、透明になりかかったものが被ることはない。本遺跡の例を考える上で非常に参考になる。



第63図 水さらし場遺構分布図

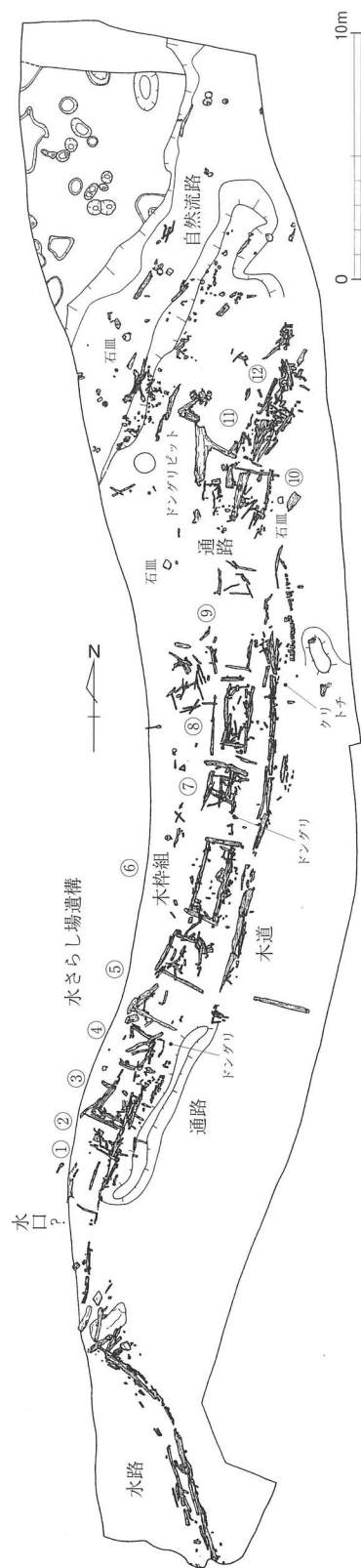
4. 本遺跡例の特徴

以上に述べたように、水さらし場は本来どこに遺跡にも必ずあったはずのものである。しかし現実には縄文時代では本遺跡例を含めて24例しか発掘例がなく、きわめて少ない。それだけでも貴重であるが、今後類例を増やしていく場合にも、本遺跡例は重要な参考資料になる。

この矢張下島遺跡例の特徴は、水さらし場遺構である水路が、遺跡の中を横切って流れていることである。その中には土坑があり、近くには作業場的な石組み遺構もあり、関連作業が近接している。これは合理的な

ことであるが、一般的には台地上の集落面から離れて、台地下に水さらし場遺構のあることが多い。段丘崖から水が噴出するという立地条件に基づくのであろう。

しかしその水路を小分けして、各家族で水路を利用していたとは考えられないことは、上記北九州市小西田遺跡例からみても明らかである。共同して、採集してきた直後のものは下流につけ、少しずつ上流に移し替えていくのである。



第64図 北九州市小西田遺跡の水さらし場遺構